夢幻紳士　現代編

NOVEL.N

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢幻紳士　現代編

【Ｎコード】

Ｎ８６２２Ｚ

【作者名】

ＮＯＶＥＬ・Ｎ

【あらすじ】

「夢幻紳士」は漫画家・高橋葉介の代表的シリーズで、昭和初期の日本を主な舞台とし、黒衣の美青年探偵「夢幻魔実也」を主人公とする連作物語です。

今回は舞台を現代に移し、もう一人の「黒衣の少年」から依頼を受けて、彼の不在と残された恋人たちを見守る夢幻魔実也の視点で、ある出来事の推移を描きます。

黒衣の来訪者

「あなた、だれ？」

その男にとっては、めずらしい失策であった。

「お嬢さん、ぼくの名前は夢幻……いえ、衛藤千尋というのですよ」

「うそよ！　姉さん、この人だれなの？　千尋（にい）兄といっしょに帰ってきたのでしょう！？」

「え？」

虚をつかれた姉が惚けた顔から、はっと我に返る。

（ぼくの術を見破るとは、この姉妹もただものではないな）

黒衣の男の名は夢幻魔実也。いまはもう一人の黒衣の男の依頼で、この姉妹を見守っている。

「いや、見守ろうとした矢先に正体を見破られるとは、もとより姉妹にぼくの加護などいらぬのではないか？　千尋よ」

中学1年生の衛藤樹梨亜にとって、3才離れた姉の樹理と彼女の恋人、千尋は理想のカップルだった。

美人で明るくて、みんなから好かれる姉の樹理。

樹梨亜から見た千尋は、こまったことが起きるとそっと相談に乗ってくれる、近所に住む優しいお兄さん。彼がいれば、何が起きても平気。どんなことでも解決してくれる。

樹梨亜は千尋に絶大な信頼を寄せていた。

ふたりが恋人になる前、子どもの頃から樹梨亜はよく千尋の後をついて歩いた。

「ねえ、千尋。早く樹理に告白しなよ」

「ば、ばか、なに言ってるんだよ。ぼくらは従姉弟なんだぞ」

そう、二人の愛にはいくつかの障害があった。

「そんなの、関係ないって。イトコ同士なら結婚だってできるんだよ。好きなんだったら、付き合っちゃいなよ」

「そんなんじゃないって。まったく、最近の子どもはマセてるなー」

「自分だって、子どもじゃーん？」

千尋の樹理に対する好意は、樹梨亜にさえミエミエなのに、本人だけは秘めたる想いのつもりでいる。

「じゃあさ、じゃあさ。お姉ちゃんと付き合わないなら、あたしをお嫁さんにしてよ」

よく冗談めかして、樹梨亜は千尋にプロポーズしていた。半分は本気だった。彼の姉に対する想いにさえ、嫉妬している自分がいる。

「なんだよ。それじゃ、まるでぼくがロリコンみたいじゃないか？」

そんなとき、千尋は少しこまったような顔をしてみせた。

千尋は力の弱い人間に、子どもや女性に暴力を振るう大人を憎んでいた。

妙に正義感が強いのは、彼の父親が中学校の教師だったせいかもしれない。普段はおしゃべりな方ではないが、怒りや正義感に火がつくと、別人のように雄弁になる。

樹梨亜と歩いていても、時折物思いに耽る表情を見せる千尋。

そんなときはツインテールの髪を揺らしながら、可愛く体をかしげる樹梨亜だった。

樹梨亜の顔は3年前の樹理に瓜二つ。

髪形やファッションの好みが違う。

小学生のころ、ショートカットにしていることが多かった樹理は、マンガの中から飛び出してきた絶世の美少年という風情だった。

樹理と樹梨亜姉妹の従兄弟だけあって、顔の作りも悪くはないのだが、ふたりと違って千尋の外見には、いまひとつ華が欠けている。

樹理と千尋が一緒にいると、物語にありがちな美形の主人公と、引き立て役の親友という組み合わせに見える。

それでも樹梨亜は彼を慕っていた。地味に見えるが、でも誠実で優しげな印象を与える少年だった。樹梨亜の知る、千尋の人柄が顔に表れているのだ。

#2

夢幻魔実也はかつて、千尋が姉妹の気性を語るのに耳を傾けていた。

幼児期の樹梨亜をはじめとして、彼は子どもに好かれるタイプの男の子だったかもしれない。

対照的なのが、樹梨亜の姉、樹理。樹梨亜の名前の読み方は、『キリア』だ。樹理は本当は『キリ』と読む。友だちはみんな彼女のことを『ジュリ』と呼んだ。本人も本名より、ジュリというあだ名を気に入っていて、自分のことをジュリと呼ぶようになった。

彼女こそは、ナチュラル・ボーン・プリンセス。生まれついてのお姫様だ。裕福な家庭に生まれた二人だったが、そんなことには関係なく、常に樹理の周囲には彼女をチヤホヤともてはやす人々の群れができていた。

例えるなら、樹理は太陽。千尋は月のような関係だった。どちらも地球に住んでいる樹梨亜へ、恵みの光を与えてくれる一対の星たちだった。

この二人が恋人同士になれば、どんなに素晴らしいことだろう。

樹梨亜のそんな願いも虚しく、千尋が行方不明になって1年が過ぎた。

衛藤一家が巻き込まれた高速道路での事故現場から、樹理と樹梨

亜の目前で彼は『消失』した。

まさに、その現場を目撃した二人だったが、それを話しても誰も信じてはくれない。信じてくれるはずなどない非現実的な出来事だった。

樹理はその日以来、人が変わってしまった。

かつての快活さはどこへやら。休みの日には、一日中オカルトの類の書籍を読みふける、ちょっと『変わり者』の女の子になってしまった。

樹梨亜もまた、そんな姉を見守るために、それまでの幼さを捨てざるを得なかった。

千尋の両親も気が狂わんばかりに、憔悴していた。以来、各地の行方不明人情報や、身元不明の死体が発見されるたびに地元の警察を訪ね歩いていいる。

千尋の両親にも、樹理と樹梨亜姉妹にも、彼の失踪について、それぞれ別々の心当たりがあった。

千尋の両親には合理的な解釈を出来る理由があった。

だが真実は、姉妹の知る非科学的な事象だった。

ともかくにも家族が一人いなくなったことで、みんな変わってしまった。

変わらずに鉄面皮を通しているのは、樹理たちの父、衛藤樹生ぐ

らいのものであった。

もうすぐ深夜１２時。一日の終わりには、家族みんなが彼を思って涙した。毎夜のように彼の夢を見る。

両親が見るのは、生まれたての彼の姿。そして日を追うごとに幼稚園、小学校と、夢に出てくる千尋は成長していった。

だけど、樹理と樹梨亜姉妹だけは、千尋の両親とは違う夢を見ていた。

不思議なことに姉妹で同じ夢を見ているのだが、その内容はあまりにも荒唐無稽でお互いに口に出すことができないでいた。

そのために、二人は同じ夢を見ていることにまだ気づいていない。

姉は夜遅くまでインターネットで怪しげなサイトを覗いては、超常現象や世界の民俗伝承などの情報を集めている。昼間出かけても行き先は、もっぱら図書館や神社仏閣。

夜ふかしばかりしているものだから、日が明けても朝食の席に現れない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8622z/

夢幻紳士　現代編

2011年12月30日00時49分発行